フランドルの冬

加賀乙彦

筑摩書房

フランドルの冬

かが・おとひこ／本名，小木貞孝。1929年東京に生れる。旧制都立高校を経て '53 年東京大学医学部を卒業。精神医学と犯罪学を専攻。病院や刑務所勤めをしたのち '57 年フランス留学。 '60 年帰国。同人雑誌「犀」および「文芸首都」同人。現在，東京医科歯科大学助教授。現住所，東京都新宿区西大久保 1 —392

*1967*年 *8* 月 *8* 日第 *1* 刷発行
*1968*年 *8* 月 *8* 日第 *2* 刷発行

著者／加賀乙彦

発行者／竹之内静雄

発行所／筑摩書房
／東京都千代田区神田小川町 2 — 8
／*TEL* 東京 291—7651　振替東京 4123

印刷／大永舎　製本／高陽堂

装幀者／斎藤寿一

定価／*680*円

©*1967*　加賀乙彦

フランドルの冬

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

1

「さあおいで。子供たち（イ・ザンファン）」鋭い張りのあるバリトンである。ロベール・エニヨンは、ぼってりした腕を力まかせに振った。

「さあ、さあ」

黄色い歓声をあげて、我先にと腋の下をすりぬけていく子供たちにロベールは目を細めた。こそばゆい快感だ。が、一人足りない。

「スザンヌ。フランソワはどうした」

スザンヌは唇に指を立て、良人の大声をたしなめた。

「二階でねてます。気持がわるいって。風邪ですよ」

ロベールはぴりっと眉をひそめた。それは彼が自分のたてた計画に少しでも支障を生じると必ず示す癖で、大抵はその次に《爆発》を、顔を紅潮させ唾をとばしての巨大な興奮をおこす前兆だった。

「だって夕食のとき、あの子は普通だったぜ」

「元気がなかったでしょ。蒼い顔をしてブダンを半分残したわ」

ロベールは《爆発》をおさえた。そうだった。ブダンを半分しか食べなかった。気分が悪いのならそうと言えばよい。黙っているからわからんのだ。まるで女の子みたいだ。いや、女の子だって末娘のキキみたいな強情なのもいる。あの子は女の子以下だ。

「で、熱は？」

「三十八度。頭痛と咳がすこし」
急にロベールは心配になった。鎮痛剤と鎮咳剤の処方が頭をかすめる。弱った。あの子はピリン剤に弱い。もちろん妻はそんなことを先刻承知のはず。何しろ彼女も医者なんだから。でも自分で診てやったほうがいい。
「大丈夫よ。ほっときゃ癒りますよ」
夫人はあわてている良人をなだめた。
「パパ」書斎から次男のベルナールが小さな顔をだした。
「パパったら、早く来てよ」
続いてカトリーヌとクリスチーヌが顔をだした。三人がキンキンと囀る。「パパ、パパったら」
「お待ち」ロベールは力一杯に呶鳴った。
子供たちも負けていない。
「パパがすぐ来いといったんだ」「そうよ、わたし達忙しいのよ。御降誕飾(ブレーシュ)りがつくりかけなんですもん」「そうよ、そうよ」
「お黙り」
「あなた」スザンヌが小声で注意した。
「ああうるさい。二つのことが一緒にできるもんか」
スザンヌは良人の額がすでにして汗ばんでいるのをみて微笑んだ。
「えい。何の話だった。そうだ。フランソワだ。あの子はちょっとおりて来れんのか」
「駄目。病気ですよ」
ロベールは大袈裟に肩をすくめた。「ああ何てことだ。年に一度の家族会議だってのに」
「なにもクリスマスの相談にあの子が加わらなくたって。あなた」
スザンヌは良人の太い腕を淑やかにとった。ロベールは妻にたよってびっこをひいた。彼は数年前関節炎を患って以来右膝がきかないのであった。ちょうど医長資格試験(デイプ)の最中で主治医の忠告を無視して頑張ったのがたたったのである。
その時、子供たちの澄みきった歌声がした。

エニヨンの王様は雷だ
雷鳴とどろき
ガラスはわれる

「ベルナールだな」ロベールはいたずらっぽく妻に笑いかけた。「ベルナールよ」スザンヌは晴れやかに頷いた。
まあ、どこで覚えこんだものか。マルケヴィッチふうに腰をひねり、鉛筆の指揮棒を優雅にふっている。そら、ドラム。管を存分にひびかせて。弱く……

エニヨンの女王様は雲だ
雨を降らせて
広野は緑

ベルナールはソファの上、アンニイとカトリーヌは机の上。クリスチーヌは床の上で唱うそばから笑いころげている。

エニョン夫妻は書斎の入口で立止った。その次がさわりだ。

ベルナール王子は河だ
麦をみのらせ
海をつくる

ベルナール作詞作曲のこの歌は、家族の一人一人について歌ってあった。いつもは全部きいてやるのだが今夜は忙しい。

「そこでやめ。ベルナール。みんな集まって。キキ。静かに」

エニョンを囲んで円陣がつくられた。長女のアンニイは十二、次男のベルナールは九つ、次女のカトリーヌ（カッチ）は七つ、末娘のクリスチーヌ（キキ）は五つ。二階で寝ている長男のフランソワは十だ。カッチとキキはスザンヌの両側に素早く席を占めていた。

「いいかな。静かに」ロベールは禿げあがった額の汗をハンケチでぬぐった。「では家族会議をやる。議題はクリスマスの準備についてだ。御馳走を何にするか。どんな友達をよぶか」

「ウワー」とベルナールが素頓狂に叫んだ。アンニイとカッチが「シー」と口をとがらす。キキはただもう嬉しくて母親の膝の上にそりかえった。

「まず、ママから御馳走について提案してもらう」

「ウワー」

「ベルナール。いい加減におし」とロベール。

「ええと、生牡蠣、豚の足、トリュッフ、雁、サラダ、アイスクリーム。ちょっと待って。お料理のほうはお客様の人数によって考えなくっちゃ。ですから、誰をよぶかってほうを先にきめてちょうだい」

それもそうだ。では議題変更。ベッチュンヌの判事ジュール叔父夫妻は例年よぶことにしているから最優先。サンヴナン（この村の名前である）小学校校長ギョーム先生はベルナールのピアノの先生でもあるからよぶ。それからリールの製鋼所技師でロベールの弟ピエール夫妻も。

「ジャンリュックもよ」とキキが口をはさむ。ピエールの長男で六つになるジャンリュックはキキとカッチの親友だ。もちろんよぶさ。

「これで何人になるね」

「六人。ああ駄目。家のものをいれると十三人になるわ」

「弱ったな。じゃもう一人」

「ブノワをよんでやったら。あなたの内勤医（アンテルヌ）になったんだし……すると婚約者のマドモワゼル・ラガンもよぶことに

なるかしら」
　ロベールは顎をぎゅっとひいて咽喉の脂肪をたるませた。
「ブノワか。どうも気がすすまん。あの男は虫が好かん。ベタベタひっつきやがる。腹黒いおべっか野郎だ」
「あなた」スザンヌが目くばせした。子供たちの前ですよ。
「どうだろう。コバヤシは。ドロマールの内勤医をしているあの日本人」
「それは妙案だけど……」
「だけど、なんだね」
「瘤つきですよ。こぶがいけません」
　子供たちに分らぬようにそう言ってスザンヌは顔を顰めた。御存知でしょう。コバヤシが看護婦のニコル・デュピベルといい仲で、ベッチェンヌで同棲してるって話はこの病院中で知らないものはない。いやしくも県立サンヴナン精神病院の医長（メドサン・ディレクトール）の家庭に看護婦を招くってほうはない。この事をロベールはすぐ了解した。
「すると誰だ」
　ベルナールが身をのりだし、非常な早口で言った。「ぼくは断然、ク、クルトンだな。あの人をよぼうよ」
　エニヨン夫妻は驚いて顔を見合わせた。
　ミッシェル・クルトンは内勤医である。この春、アルジェリアの戦場からひょっこり復員してきた。まだ徴兵期間はあまっていたが重傷を負ってアルジェの病院で治療をうけ、回復するやそのまま除隊になったという。すっかり痩せ衰え、皮膚は褐色に変って、きたならしい病人になっていた。そんな病身のくせに酒は飲む、喧嘩はする、女をめぐっていやらしい風聞が絶えない。しかも無神論者で教会へも行かない。入隊前からカミーユ・タレという患者の家庭訪問員（アシスタント・ソシアル）と内縁の仲だったが最近二人は別居したという。とにかく悪評嘖々たるならず者なのだ。
「ベルナール。これは真面目な家族会議なんだぞ。よりによってクルトンだなんて」
　ロベールは嫌悪のあまり吐きすてるように言った。
「ベルナール」スザンヌがやさしく言った。「どうしてクルトンをよびたいの」
「だって親友だからさ。ぼく約束しちゃった。クリスマスには家においでって」
「親友だって。ああ」ロベールはじだんだ踏んだ。
　ベルナールは雀斑のうっすらとついた茶目っけのある小さな頬をふくらませた。「パパ。いい人だよ。あの人。それにひとりぼっちなんだ。カミーユとは別れたんだってさ」
　カッチとキキがベルナールに同調して甲高く騒ぎたてた。
「クルトンがいい。彼にしましょうよ」
「ああ」ちっぽけな子供たちにからかわれている具合のロベールは、すっかり落胆して太った体をくねらせた。「ああ、何てことだ。何てことだ」
　一同が混乱状態に陥ったときスザンヌが静かに言った。
「アンニイ。お前はどう思う」

不意に騒ぎが鎮まった。そうだ、アンニイがいた。すっかり忘れていた。アンニイならみんなが納得できる意見を言うだろう。アンニイはいつも落着いている。もう子供じゃない。この春、聖体拝受の白衣を着てアミアンの大聖堂にほかの女の子と並んだとき、すっかり成熟した美しい女性という印象だった。アンニイの胸があんなに豊かにふくらんでるなんて誰が予想しただろう。

みんなに見つめられてアンニイは面映ゆげにまばたきした。しかし声は穏やかで明瞭だった。

「わたくしはこう思うわ。誰かをよぶとしたら、よばれた人が喜んで、それでよぶほうも嬉しいような人よ」

「クルトンなら大喜びだよ。彼は孤独なんだ」ベルナールがませた口をきいた。

「で、アンニイ。クルトンはどう」スザンヌがきいた。

「あの人ならいいでしょ。面白い人よ。アルジェリアやモロッコの切手をたくさん持ってるし、お話は上手だし、いい人よ。でもパパはクルトンが嫌いなんでしょう」

「そうは言わんさ。これは会議だからな。みんなの意見に従うよ」ロベールは苦笑した。アンニイのやつ、すっかり大人びた調子だ。おれとは全然似ていない。スザンヌそっくりだ。こいつはスザンヌの遺伝なんだ。

「クルトンだ。クルトンだ」子供たちがいっせいに叫んだ。

ロベールは両手で耳に栓をした。

「よし、わかった。彼に決定。スザンヌ。いいだろうね」

「あなたさえよければ」スザンヌは目をつぶった。

次の議題、御馳走の件をにぎやかに論議しはじめたとき、玄関の鈴が鳴った。いち早く気がついたベルナールが「しっ」と一同を制した。再び鈴が鳴った。こんな時刻に誰だろう?

ロベールのいいつけで玄関口までとんでいったベルナールが息をはずませて帰ってきた。

「ブノワだよ。ブノワがパパにおりいって話があるんだって。非常にきんきゅうなんだって」

「お通ししなさい」

「ここに」

「そうだとも。私たちには秘密はない」

「でも……」

「どうしたんだ」

「なんだか変なんだよ。小さな声でね、そおっとパパをよんできてくれっていうんだ」

「チョッ」ロベールは眉をひそめて舌打ちした。「あの男ときたら。用事なら電話をかけりゃいい。こんな遅くに個人的な話でもないだろうに。それにおれを呼びだすなんて無礼きわまる」

「いっておやりなさいな。あなた。なんてったってブノワはあなたの部下なんだから」

ロベールは熱くなりかけた《爆発》を腹におさめるかのように丸く突出た腹をなぜ、杖をとった。

大柄で堂々とした恰幅のブノワは、白衣の上に医師専用の青外套を着て、街灯の光の輪の中に寒そうに立っていた。不安げに肩をゆすぶり、何か思いつめた表情で、ロベールがまだ歩いているうちからせっかちに喋りはじめた。

「弱ったことがおきたんです。大事件です。司祭が発作で倒れたんです。脳溢血の発作ですね。ぼくが診て、たしかに脳溢血なんです。それなのに、院長は信用しないんです。内勤医じゃ信用できん。医長をよべ、それも主任医長をよべ。つまりドロマールをよべ、とこうなんです。ところがドロマールは来ないんです」

「チョチョチョ、君の話はさっぱりわからん。司祭ってどこの司祭だ。ドロマールが来ないってのは？　順序をたてて話してみたまえ」

「すみません」ブノワは頭を下げた。鼻翼に汗が光っている。

「今晩、ぼくは当直医なんです。八時過ぎに電話が入りました。総婦長のヴァランチーヌ尼で、病院司祭様が突然倒れたという。かけつけてみるとエスナール神父がベッドで大鼾をかいていました。瞳孔をみると左が拡大しています。ゆっくりとした呼吸で意識はありません」

「で、なんだと思うんだね」ロベールは、急に論理的な説明調になったブノワの話しぶりに、今度は苛々としだした。「結論をはやく言いたまえ。君の診断は？」

「左側の脳出血です」ブノワはこの重大な情報の効果をたしかめるように、心もち胸をそらし、自分より背の低い医長殿を見おろした。

「ふん。それで」ロベールはとり合わなかった。

「そこへ、フージュロン院長がやって来ました。ぼくが診察中なのに、ドロマール医長をよべという命令です。まるでぼくを無視してるんです」

ブノワは口をとがらせ肩をゆすった。この不平屋がよくやる仕種である。

「この病院では、司祭の病気は主任医長が看取ることになっている。単なる習慣にすぎんがね」

ロベールがいかつく言った。

「そうですか」ブノワは一瞬不快な表情を走らせたが、すぐと元気よく、まるでとっておきの打明話をするように芝居じみた声で語った。「それからが大騒動なんです。御存知のようにドロマールの公舎には電話がありません。夜の静粛を乱すとかで十年来電話なしなんです。そこでヴァランチーヌが駈出して行きすぐ戻って来ました。玄関の呼鈴をいくら押しても返事がないというのです。ドロマールが家にいることは確かなんです。入るところを見た看護婦が三人もいます。ところが彼が外出した姿をみたものは誰もいない。そこでぼくが出むきました。二階に電灯がついている。誰かが歩いている影がカーテンに映っています。彼は中にいるのですよ。そこで小声でよんでみました。返事がありません」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「小声で？」
「そうですとも。だって、彼は大声を極度に嫌いますからね」
「で、どうしようというのだ」
「御願いがあるんです。ヴァランチーヌやぼくにできなかったことを先生にやっていただきたいのです。つまり、ドロマールの家の前で、彼を大声でよんでいただきたいのです」
「チョ、チョ、チョ」エニヨン医長は、まんざらでもないといったように何回もうなずいた。当病院ひろしといえども、ドロマール医長に大声で叫べるのはエニヨン医長をおいてほかに無い。
「行ってくださいますか」ブノワはほっとして、急に陽気になったエニヨンに遠慮がちの微笑を送った。
「行ってやるよ。莫迦げたことだがね。とんでもない主任医長殿さ。いったい、受持病棟（セルヴィス）に夜、急患がでたとき、どうやって彼に連絡をとるんだ。君はついこないだまで彼んとこにいたから知ってるだろう。急患はどうするんだ」
「翌日の朝まで待つんです。だって仕方がないでしょう」
「ああ莫迦げてる。それでも医者かね。ところで患者の処置はぬかりないだろうね」
「頭と心臓に氷嚢を置くよう指示しておきました」
「脳出血の場合は最良の処置だ。よろしい」
「コバヤシにたのんでついてもらってるんです。あの男は立派な医者ですから心強いです」
ロベールは二、三歩外へ出ていき、冷い夜風にふるえあがった。
「スザンヌ。外套だ」
病院の南の塀の外側に、医長公舎が並んでいる。東からマッケンゼン夫人、エニヨン。正門の近くにフージュロン院長邸。門をはさんで西には会計主任（ヴェ・ノ・ム）のベカールの家。さらに西寄に通称《小棟（プチ・パヴィヨン）》とよばれる空屋があった。プチ・パヴィヨンは、以前医長公舎であったが、生い茂った蔦につつまれ窓も壁も区別のつかぬほどの廃屋となっている。噂によれば戦争中ここでナチ親衛隊が村のユダヤ人を虐殺して以来誰も住まなくなったのだそうだ。そこから三十メートルほど砂利の小道を行くと突当りにドロマールの公舎が深閑とした闇に潰っている。うしろはフランドル地方特有の鬱蒼たる巨木の森である。それは寂しいうえに不便きわまる場所なのだ。マッケンゼンとエニヨンの公舎が病棟に近く、国道に面した立派な車庫をそなえているのに、ドロマールのところは、遠いうえに奥まっているので車庫もつけられない。その上、電話もないときているのだ。ブノワの懐中電灯がなかったら道の見当もつきかねたほどに、あたりの闇は濃かった。
なるほど二階の窓のカーテンにうっすら明るみが染みている。呼鈴を押してみる。電源がきれているのか反応がない。扉をたたいてみる。建物全体が廃墟のように手応えが

なかった。
エニヨンは決心し、持ち前の大音声で二階の窓を呼んだ。
「ドロマール！　エニヨンだ。急用だ。司祭が、エスナール神父が倒れたんだあ」
答はない。すでにエニヨンは腹を立てていた。熱烈な《爆発》が胸から頭へ沸騰した。繰返し絶叫しているうち、ついには我を忘れて猛り狂っていた。
とにかく反応はあったらしい。カーテンが動いたとか、電灯がゆらいだとか、足音がしたとか、そんな気配がした。二人は待った。ながい気詰りな時間に思われた。高い梢を黒い風が物凄くきしませていた。ブノワは何かを言わなくては礼儀に欠けるという気持になって自分の医長殿に話しかけた。
「知事が来るそうですね」
「……」
「もっぱらの噂ですよ。来年のはじめに県知事の視察があるって。ベカールが大車輪で病院中の修理をはじめたのはそのためだって。ほんとうでしょうか」
エニヨンは肩をすくめた。そんな噂はどうだっていいじゃないか。司祭が発作で倒れたんだ。それ以外のことを考えるのは場ちがいで不謹慎だ。ブノワは恥じ入って黙りこんだ。しかし、心中はおだやかではなかった。ちぇっ。医長だと思ってえらぶってやがる。おれが来年医長資格試験を通れば、おれはこの男と同等だ。もう少しの辛抱だ。みていろ。
玄関のカーテンが、すっと切られたほどに細く開き、誰かがこちらを覗いた。ポーチの電灯がともり、扉が用心深く開いた。
「何の用だ。エニヨン」
エニヨンが手短かに事情を話した。
「さあ中に入りたまえ。隙間風が気持わるい」
ドロマールはぴったり入念に扉をしめた。
エニヨンもブノワもこの家の中ははじめてだった。で、物珍しげに見廻わした。異様な感じである。両側の壁には、入口から奥の階段まで紫色の厚いカーテンが天井から垂れ下っている。絨毯も紫だ。天井も赤っぽく塗られている。廊下はまるで血塗られた洞窟のようだ。
ドロマールは赤い絹のガウンをまとっていた。痩せぎすな男で背はブノワより少し低くエニヨンよりはるかに高い。驚いたことに白い外科帽をかぶっていた。フランスの年輩の医者によくあるように、院内で必ず外科帽をかぶるドロマールの習慣は有名であった。だが自分の家の中でまでそれを着用するというのはどうした趣味だろう。
ドロマールはにこやかであった。明らかに同僚のエニヨンを意識している。内勤医や看護婦の前で示す、あの剃刀のように峻厳な態度とは雲泥の差だ。
「失礼した。ぼくは夜、早いんでね。まさか、君がじきじき来てくれたとは思わなかった」

エニョンに鄭重な礼をいい、握手して外へ送りだすと、ブノワの怖れていたようにドロマールはがらりと人が変わった。ガウンのポケットからとりだした金縁眼鏡を目の前にかかげ、細字の書物でも調べる具合にブノワの顔に近付いた。

「司祭の容体は？　君の診断は？　処置はどうしたか」

ブノワは、以前ドロマールの内勤医をしていたときいつもそうだったように、しどろもどろに自分の診たところを報告した。ドロマールは神経質にピリピリと首を振った。

「脳出血か。それだけじゃ根拠が薄弱だ。脳血栓とどうやって鑑別するね。こんなことは医学の初歩だが重要なことだ。脳の血管が破れて内出血をしたのか、それとも脳の血管がつまって脳軟化症をおこしたのか。それによって治療が全然ちがう」

「……」

「たとえば君はプレボスト氏徴候を調べたかね」

「プレボスト？」

「そうさ。共同偏視（デヴィアシヨン・コンジユゴ）。出血した側に眼球が回転するやつさ」

「ああ。それは……」

「調べなかったのか。顔面神経麻痺も見落したな。左側の脳出血だと断定している君の根拠は、それじゃ、瞳孔の左右差だけじゃないか」

容赦なくそう言うや、ドロマールはふと不機嫌に額に皺を立て、口を緘んだ。ブノワは悄然とうなだれた。なまじ背が高いのがかえって気がひける。

エニョンの前だったら多少の心のゆとりも持て、ひそかに反抗心を燃やすことも可能なのだが、このドロマールの前では徹底的に押しひしがれてしまう。何もかも見透されてしまい、自分の立つ瀬がなくなるようなのだ。今年、ドロマールが医長資格試験（ダ）の審査員であったあいだ、彼はドロマールの内勤医だった。ところが、来年はエニョンが審査員に選出されそうだという情報をつかむと、彼はドロマールを去ってエニョンの内勤医になった。もちろんおもてむきの口実は、最近エニョンが創始した抗酒剤の皮内移植手術を習うためということではあった。が、ドロマールはブノワの小利巧な立ちまわりを見抜くだけの力はもっている。そんなことでブノワはドロマールの前で一層気がひけるのであった。

もっと悪いことがある。エニョンが審査員になるという情報をもらしたのは、このサンヴナンにほど近いノール県立の精神病院であるアルマンチェールの新医長ヴリアンである。ヴリアンはつい今年の春までエニョンの内勤医をしていた男で、ブノワの幼馴染みでもあり、医長だけがつかみうる秘密情報をブノワに心やすくもらしてくれたのだ。ところが半月程前、ヴリアンは情報を訂正した。エニョンは審査員にはまだ若すぎるという声が多いため、どうやらドロマールが再選されるらしいというのだ。思惑のはずれ

たブノワはすっかり意気銷沈した。彼の前に再びドロマールの姿が偉大なる人物として浮かびあがってきたのである。

白衣に着替えたドロマールは、糊のきいた外科帽を少し斜めにかぶり、青外套――これもブノワのよりは上等品であった――を袖を通さずマントのように肩にかけ、ブノワを従えて外に出た。

病院の正門を入るとすぐ、桃色の石灰岩造りで、擬ゴチック風の立派な礼拝堂がある。司祭館はその裏手の図書館の前にあった。そこはマロニエの大樹の並木道に面していて、夜は人通りも稀な区域である。が、今夜は看護尼たちがあわただしく往来し、司祭館の窓という窓には煌々と明りがともり、何か尋常ならぬ雰囲気をかもしていた。

なにしろ有徳のエスナール神父様の御病気なのだ。お年は九十をすぎられたそうだ。本当の年齢は神父様御自身にもわからないという。もう六十年以上も前から、つまり前世紀の昔から、この病院がまだリールの聖母協会に付属していて、現今のように俗人の看護婦など含まず純粋の看護尼だけが働いていた聖なる時代から、エスナール神父は病院司祭をやっておられたのだ。たしかに最近はおとしのせいか御説教もまわりくどく発音も空気がぬけて何が何やらわからないけれども、それでもあのおやさしい御眼や御口元には慈愛の光が充ちみちている。神父様にくらべれば、総婦長のヴァランチーヌ尼なぞまるで生れたての赤子のようなものだ。

廊下は看護尼の黒い衣で占領されていた。おしなべて深刻そのものの表情をのぞかせ、一人が十字を切ると一律にそれに倣った。ドロマールとブノワに期待をこめた目が集まった。会釈し道があけられる。それでも、尼さんたちの円っこい肩や背中をおしわけて進まねばならなかった。

狭い部屋の中にこうたくさんの人間が犇めいていたのではたまらない。壁にそって看護尼の一団が並び、院長のフージュロンと総婦長のヴァランチーヌの蔭にようやく司祭のベッドがみえた。コバヤシが病人の脈をとっていた。暖房がききすぎているうえに、人いきれが加わり、むんむん息詰まるほどだ。

ドロマールの登場は劇的であった。待ちかねていた人々がさっと身をひくと、真直ぐベッドにむかって足を速め、肩にかけた青外套を落下傘のように後にあおった。それはブノワが外套の端で顔をしたたか逆なぜされたほどの勢いであった。

まず病人だ。

「具合はどうか」ドロマールはコバヤシにたずねた。

「危険です。脈が速く、不規則です。完全な昏睡状態です」

「よし」力強くいう。それからくるりと振返った。「ああ君たち、これじゃ診察ができない。医者とヴァランチーヌ尼以外は部屋をでてもらいたい」

看護尼たち――部屋の中にいるのは病棟主任の尼僧ばかりだった――は不承不承に退出しだした。

「わたしもかね」フージェロン院長が言った。院長は事務官なのである。
「もちろん。医者とヴァランチーヌ尼以外は出ていただく」
ドロマールの剣幕には院長といえどもかなわない。院長は未練がましく戸口へ行き、そこで出会がしらに入ってきた会計主任のベカールを連れて隣室に移った。
場がこうしてごたついている間にブノワはコバヤシに囁いた。
「氷嚢はどうした」
「とりはずした」
「なぜ」
「血圧は低いんだ。心臓の衰弱だ。こんな場合氷嚢は禁忌だよ。ぼくは思うに、これは脳出血じゃないね。脳血栓だ。見たまえ、神父の顔を。蒼白で血のかけらもないだろう」
ブノワは温度表をコバヤシの手からひったくり食入るようにみつめた。脳血栓だ。ドロマールの言うとおりだった。おれは誤診した。血圧をあげて脳の血流をよくするべきなのに、全く逆の処置をしてしまった……
「さてと」ドロマールが近付いた。「ドクトゥール・コバヤシの診断は？」
ブノワがあわてて口を挿んだ。
「よく考えてみると、やはり脳血栓らしいです」
「待ちたまえ」ドロマールは邪険にあしらった。
「君の意見はさっききいた。ぼくは、ドクトゥール・コバヤシにきいてるんだ」
コバヤシは日本人特有の、フランス人のいう《神秘的な微笑》（少なくともこの厳粛な場面で笑顔をみせることは異様なことだった）を浮かべて、ゆっくりと、しかしなまりのない正確な発音で意見をのべた。
「ブノワの言う通りだと思います。脳血栓でしょう。突然来たものとは思えません。さっきヴァランチーヌ尼からきいたのですが、司祭殿はこの数年ぼけかたがひどく、聖書の文句を忘れたり御説教の最中に眠りこけたり……」
ヴァランチーヌは制服の幅広なカラーをわざときしませてコバヤシに注意した。あれは内緒にした話です。医長先生に申しあげるべきことではありません。けれどもこの正直で善良な外国人は、ヴァランチーヌの洗練された合図に全く気が付かなかった。
「つまり徐々にはじまった脳動脈硬化です。その徴候はそろっています。低血圧、蛋白尿、心臓の衰弱、この老齢でおこるべきことがおこったのです」
ドロマールは満足げに大きくうなずいた。彼がじきじき診察する番だ。ヴァランチーヌが診察器具をのせた銀盆を頃合よく差出した。
ブノワは感嘆と感謝と嫉妬をこめてコバヤシに片目をつぶってみせた。パリのサンタンヌ病院で二年間勉強し、今

年の四月に、国際的にも有名な精神病理学者であるドロマールの盛名をしたってこのサンヴナンに内勤医として赴任してきたこの男、無類の勉強家で本の虫で日曜日も終日机にむかうかと思えば、看護婦のニコルと熱烈な恋愛をはじめベッチュンヌ（サンヴナンから十三粁南にある人口五万の町）で同棲生活をやってのける。おれにこの黄色い小男くらいの頭と精力があれば、《メディカ》なんかいっぺんで通ってみせるのに。

フージュロンは眼鏡をはずし、目を細めて相手を見定め、威厳と親密さを自分の顔に意識しながら、自慢の美しい白髪の頭を動かした。

「で、A三病棟の渡り廊下のペンキは？　あれはひどいね。ああ煉瓦が無様に露出しているとみっともない。ペンキをうんと塗りたくる必要がある」

「あそこは新年早々に手がけるつもりなんです」ベカールは万事抜目なく心得ているというように、酒やけのした赤い顔で院長にまばたきした。この男も白髪である。白髪と赤い顔のため狒狒という綽名でよばれている。

「現在、病院中のペンキ屋は全員屠殺場の改装にまわっていて今年中は手一杯なんです」

「なるほど。まあかけたまえ。君、葉巻をやるかね」

フージュロンはふんわりとソファに腰を沈めたが、ベカールは謙虚に立ったままでいた。差出された葉巻を叮嚀に受取り、ライターで院長のと自分のとに火をつけた。

「結構なお葉巻で」

「なに、先週の日曜日ベルギーへ行ったついでに密輸してきたやつだよ」

「はあ」

ベカールは、半開きのドアからみえる尼さんの影を落着きなく振返り、急いでドアをしめに行った。部屋の中は二人きりになった。

「実は内密にお話ししたいことがあるんです。屠殺場の改築の件なんですが」

「言ってみたまえ。何か問題があるのか」

「こんな場合、とくに今夜みたいなとりこみの最中に申しあげにくいことなんですが、御承知のように屠殺場の改築は元々エスナール神父の御申出ではじまったわけでした。つまり殺されていく憐れな牛どもの悲鳴をきくにたえんというので厚いコンクリート塀で囲むことになったわけです。わたし自身は当初から、この病院予算では手にあまる大工事だと危惧していたので反対意見を申し上げていたわけです。実際はじめてみますと、立案当時より予想外に人件費があがってましてね。できたら今からでも中止したらどうかと……まだ溝を掘っただけの段階ですから、やめようと思えば今からでもやめられます」

「しかし」

ベカールは院長をおさえて、急に共犯者めいた微笑を近

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com